

妓風

六十三人、四寸二寸はまれに出る故、數すくなし、なみ局五百人餘、あげや十四軒、茶屋五十二軒、
 〔嬉遊笑覽九娼妓〕原武が雜記、○中女郎の風俗も、昔は紅粉おしろいをむさき事とし、揚屋女郎の薄
 げさうだに、あげや風とはいひながら、いやしきことにいひなし、髪はひやうごに引むすび、あら
 ぐしにてすき上げ、つまべにつまらくしの草履、地女とちがひ、きれいなるを女郎とせしに、今の
 風は髪は油がため、櫛はあしだのはの如くなるを二三枚さし、かんざしとて色々もやうをした
 る七八本さしちらし、天氣のよい日も下駄がけ、揚屋入といふ事しらず、おどり子かともれば、小
 袖の數をきる云々、

〔蜘蛛の糸巻〕妓風

天明の後廿年ばかり、文化の比まで、おゐらんと稱せらるゝは、大方は横兵庫といふ髪の風なり
 しに、近年此風たえ、むかしを失ふさしかざるかんざしは、昔にまさりて、大きになりしなり、天明
 の頃は、いかに細くかるげなり、されば今の如く、馬蹄は頭にのせざりき、女の髪の結ひぶりの
 始は、唐輪、其後、兵庫、次に島田丸髪一名勝山、次に玄ひたけ、

〔近代世事談綺一衣服〕女前帶

明暦萬治のころより起る、京祇園清水邊の茶屋女、參詣のあまたある時は、帶のとけたるをむす
 びて、うしろへまはすいとまなく、前にてむすびたるまゝ、にて、茶酒の給仕をえたり、一人より二
 人へうつりて、いつとなく、島原の傾城、あるひは茶屋遊女前にてむすぶ、京の町女、又田舎にわた
 りて、世間一統に此風をまなぶ、大きな略義なり、今以御所方あるひは、武家の奥方にて、老若と
 もに前帶にする事曾てなし、

〔嬉遊笑覽九娼妓〕

すあしは天和のころよりと見えたり、色道大鑑に、す足を本とすといへれど、其頃
 は足袋をはきしなるべし、一代男六女郎も衣玄やうつき玄やれて、すみ繪に源氏紋所もちいさ